

鵜ガ島台式土器の研究

川部 菜里

要 旨

本論文は縄文時代早期後葉の鵜ガ島台式土器の変遷とその地域性を論じるものである。鵜ガ島台式土器とは、貝殻で条痕を施す条痕文形土器の一種で、文様の区画交差部に円形の刺突文が押捺されるという大きな特徴を持つ土器である。前型式の野島式、後型式の茅山下層式から鵜ガ島台式に内包される要素（器形、施文技法）を抽出し、遺構の切りあいに基づく層位情報から野島式を受け継ぐ初期段階、襷状文が変化していく中間段階、茅山下層式へと続いていく終末段階の三段階の分類項目を設定した。そして次に口縁部文様帯の文様モチーフの系統変化を型式学的に検討し、分類項目と合わせて細分案を提示した。

新たな細分案をもとに、鵜ガ島台式土器が出土した遺跡の段階別の分布を確認した。

文様帯構成の変化と施文手法の変化が一致していることが確認できた。また従来は粗雑化としてとらえられていた文様帯モチーフ構造の変化は文様帯構成の変遷によって導かれており、段階ごとに施文意識が非常に統制されていたことを指摘した。

前型式の野島式同様、香取海沿岸南部、三浦半島を中心に分布していた鵜ガ島台式土器は終末段階になると香取海沿岸北部の茨城県にも分布域を広げることが指摘した。

キーワード：縄文時代、早期後葉、条痕文土器、鵜ガ島台式土器

はじめに

鵜ガ島台土器とは、神奈川県鵜ガ島台遺跡を標識遺跡に持つ、縄文時代早期後葉の土器型式である。土器の器面を二枚貝の放射肋で調整する際につく擦痕状の文様をもつのが特徴で、条痕文土器として分類されている。

鵜ガ島台式土器は、先行型式の野島式土器と後続の茅山下層式土器との間に型式学的に設定され、1980年代から現在にかけて、いくつかの細分案が提示されている。

しかし、従来の細分案では文様モチーフなどの検討が十分に整理されてこなかったこともあり、東海、東北で出土する同型式とされる土器との属性比較が困難になっている。加えて、口縁部文様帯の研究と比べると胴部文様帯の研究はあまり進んでいない。そのため、胴部文様帯に他要素が流入するような現象から地域間関係を探るような議論も試みられたことはなかった。

本稿では、従来の口縁部文様帯文様モチーフを基準とした細分案に加えて、胴部文様帯の分析も加えて、包括的な細分案を提示する。また、その細分案から地域的な広がりを検討していきたい。

1. 研究史

1-1. 早期後葉の条痕文系土器の分布

鵜ガ島台式は関東を中心に、近畿地方まで拡大する。

第1図は鵜ガ島台式土器出土の遺跡の分布図である。

1-2. 関東地方の早期後葉の土器の研究史

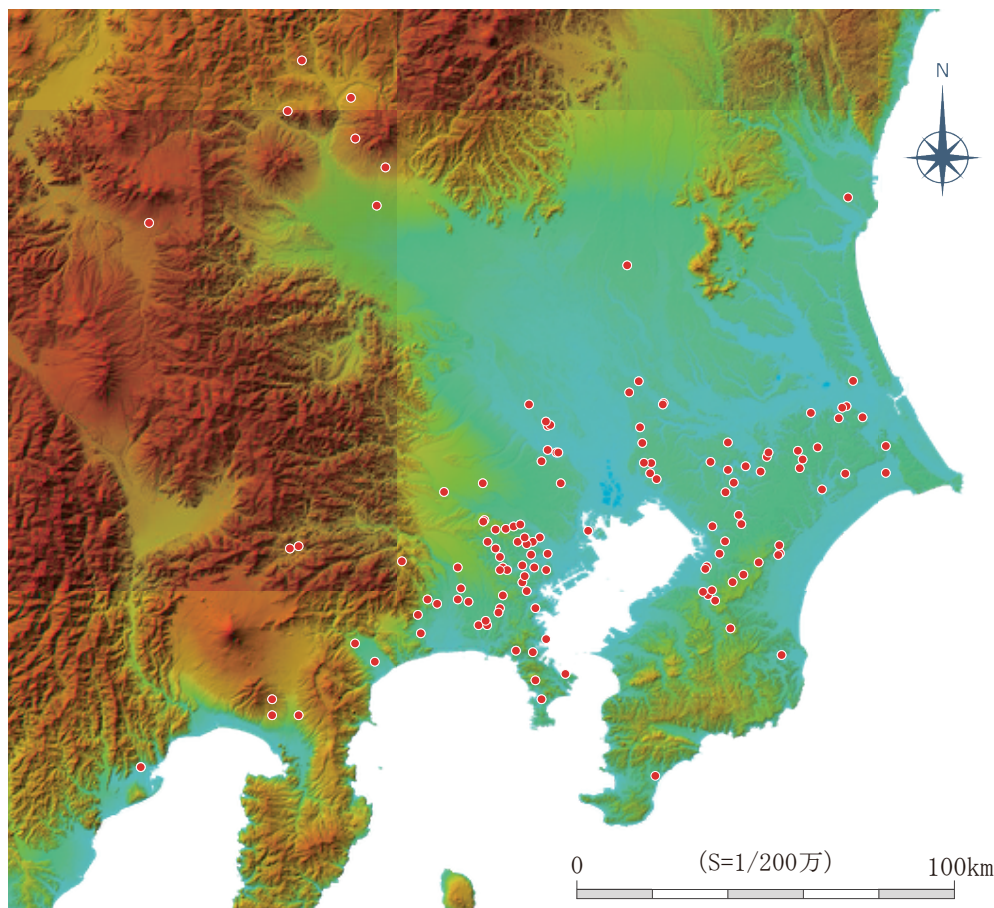
1-2-1. 繊維土器

繊維土器について研究史初期に論じたのは山内清男である。「下総上本郷貝塚」では、千葉県松戸市の上本郷貝塚出土の資料とともに、それまでの編年研究のまとめとして、①繊維を含む土器型式 ②繊維を含まない土器型式 ③「勝坂」または「阿玉台」④加曾利E ⑤堀之内 ⑥加曾利B ⑦安行へと新しくなる編年を立てる。「繊維を含む土器型式」が、現在の条痕文系土器に当たる（山内 1928）。

特に、土器胎土中に含まれる繊維に注目した論文である「関東北に於ける繊維土器」（山内 1929a）では、繊維土器を関東北における最も古い土器とした。この論文内で山内は茅山貝塚の土器を紹介しており、ここで出土した土器を茅山式と通例的に呼んでいた。山内の型式設定以降、茅山貝塚をはじめとした三浦半島を中心とする貝塚群の層位学的な調査と型式学的な検討から、茅山式の細別型式編年が確立される。

1-2-2. 鵜ガ島台式

赤星と岡本によって、茅山式の4細分が行われ（赤星・岡本 1957）、岡本勇が鵜ガ島台遺跡を報告し（岡本 1961）、層位学的、型式学的に鵜ガ島台式の位置づけを確定させた。



第1図 鵜ガ島台式土器出土遺跡分布図

関野哲夫は「鵜ガ島台式器細分への覚書」を発表した（関野 1980）。区画交差部における円形刺突文の発生をもって鵜ガ島台式土器の成立とし、円形刺突文の消滅をもって終焉するという論を提示した（関野 1980）。鵜ガ島台式土器の細分の可能性を言及した功績があげられる。

1-2-3. 鵜ガ島台式土器の細分

関野が細分案を発表した後も各研究者による細分が提案された。佐々木克典は、東京都神谷原遺跡の報告書中で襷状文に注目した鵜ガ島台式土器二段階細分を提示した。襷状文の確立し展開したものを第一段階、襷状文が崩れ、簡略化され新しい文様要素が加わったものを第二段階としている（佐々木 1982）。

1995年に井上賢が千葉県城ノ台南貝塚調査報告の中で、同年高橋満が神奈川県市兵衛谷遺跡報告書内で鵜ガ島台式土器について言及している。佐々木と同様、いずれも区画交差部の刺突文をもって鵜ガ島台式土器が成立したとはとらえていない。井上賢は特に文様帯変化をメルクマールとする論を展開し、その後の「鵜ガ島台式土器古期の様相」においても野島式と鵜ガ島台式を区別するのは、「文様帯の分離」であると唱えている。野島式

期終末段階を野島2式として設定し、野島2式も鵜ガ島台式も上下二段の文様帯構成を持っているが、野島2式は縦位区画文が上下の文様帯を貫通しており上下段が未分離となっていることを指摘した（井上 2012）。金子直行は「縄文早期鵜ガ島台式土器の成立過程について」で野島式から鵜ガ島台式土器への変遷について言及したが、井上の型式観と共通しているようである。この型式観は、上記の論文内で多摩ニュータウン No.351 遺跡出土土器を野島式終末期としていることからわかる。元々、多摩ニュータウン No.351 遺跡報告書（原川 2002）内では鵜ガ島台式と比定されていたが、井上編年では上下帯を上位区画文が貫いていることから野島2式に弁別している（金子 2017）。

1993年には渡辺修一が千葉県地藏山遺跡の報告書で、鵜ガ島台式土器の4細分案を唱え、地藏山遺跡出土の土器を最新段階に位置づけた（渡辺 1993）。

1998年、鈴木啓介が「鵜ガ島台式土器の変遷」で文様交点の刺突文及び文様帯分離を総合的に判断した。鈴木は上下の文様帯分離をもって鵜ガ島台式の成立とみなす研究の妥当性と、岡本により設定された鵜ガ島台式のメルクマールを区画交差部押捺におく型式内容が今日において成立するのかを検討する必要があると述べた。結

論として鈴木の本細分案は、文様要素と文様モチーフの分析と、その組み合わせから論じているが、細分内で上下帯の文様分離については触れられていない。しかし、施文具に着目した点は多くが破片資料として出土し、復元できる個体数が圧倒的に少ないことから、鶴ガ島台式期において有効であった。

2001年には、野内秀明が鶴ガ島台式後半期の土器について言及している。鶴ガ島台式前半期に胴中位から胴下位まで展開していた文様帯が、土器の胴部上位に凝縮化することで器形の屈曲が強くなること、後半期に新たに表れる文様モチーフとして把手下文様の成立・発展で出現したX字文や多面分割文様内の変化で成立した弧状文などを挙げている（野内2001）。

1-3. 問題提起と解決試案

本稿で扱う鶴ガ島台式土器は、研究史上では南関東だけではなく北関東、東北、甲信越、近畿にまで広く分布し、また地域差が少なく斉一性が見てとれるとされてきた。その斉一性とは、メルクマールとしてきた円形刺突文や襷状文などの典型的な文様モチーフに注目した結果である。

しかし、縄文時代早期において同一の土器制作集団が数百km圏内に広がっていたとは考えにくい。また、報告書内で信州や東北の鶴ガ島台式には胎土や文様モチーフにおいて地域性も見取れる。よって、今回は他地域との比較を可能にする基準を見出すため、関東を中心にみられる系統内の円形刺突文や襷状文などの文様モチーフ以外の要素を抽出したい。

また、胴部文様帯に含まれる要素も抽出し、今後異系統土器や折衷土器を検討するための基礎を築くことを目指す。

抽出した要素と研究史上の細分案とを合わせて検討し、他地域の同様だと思われてきた型式との対比が可能になるように新たな細分案を立案したい。

2. 分析

2-1-1. 分類要素の抽出

まずは、層位的に編年が確定している鶴ガ島台式の前後型式である野島式、茅山下層式から、鶴ガ島台式に通じる器形、口縁部形態、施文技法、文様モチーフの要素を抽出してみる。

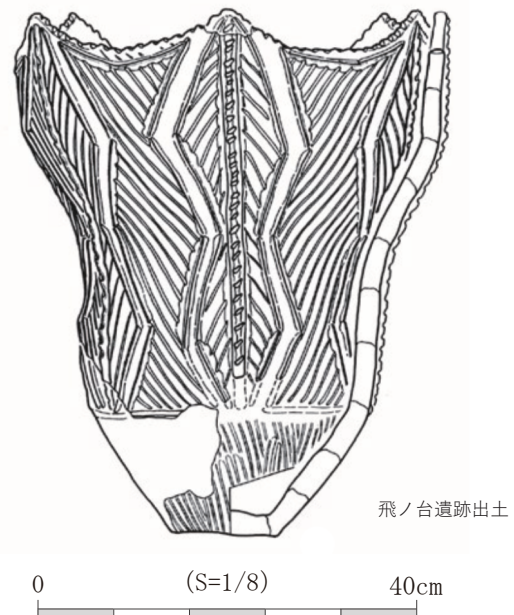
第2図は飛ノ台貝塚にて出土した野島式土器である。野島式土器は緩い括れを持ち、口縁部形態は波状、平縁のものがある。口縁部文様帯に縦位区画を持つ。文様モチーフとしては襷状文があげられる。施文技法は主に細

隆起線と沈線で、特に充填には沈線を用いる。

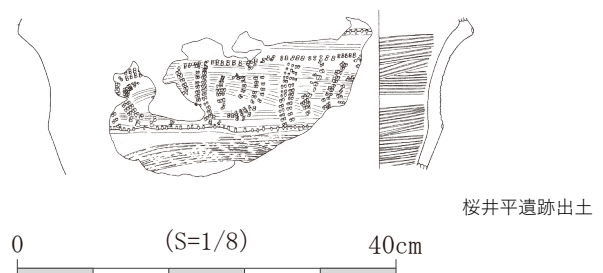
第3図は桜井平遺跡で出土した茅山下層式の土器である。器形の特徴としては野島式土器に比べて強い括れと、口縁部形態にはこの土器のように平縁のほかに、波状、環状把手があげられる。また野島式土器にはある縦位区画が茅山下層式土器にはない。施文技法としては沈線と充填に刻みの採用があげられる。

これら前後型式から鶴ガ島台式へ土器とつながる系統を辿ると、野島式土器の要素を受け継ぐのは、緩い括れを持ち、区画文の施文技法に細隆起線や沈線を採用し、充填文に沈線を使用しているものと考えられる。

また茅山下層式土器へと続く要素を持ち始める土器は、強い屈曲部、環状把手を持ち、充填の技法に刻みを採用しているものと考えられる。また文様モチーフには曲線的な文様を採用している。



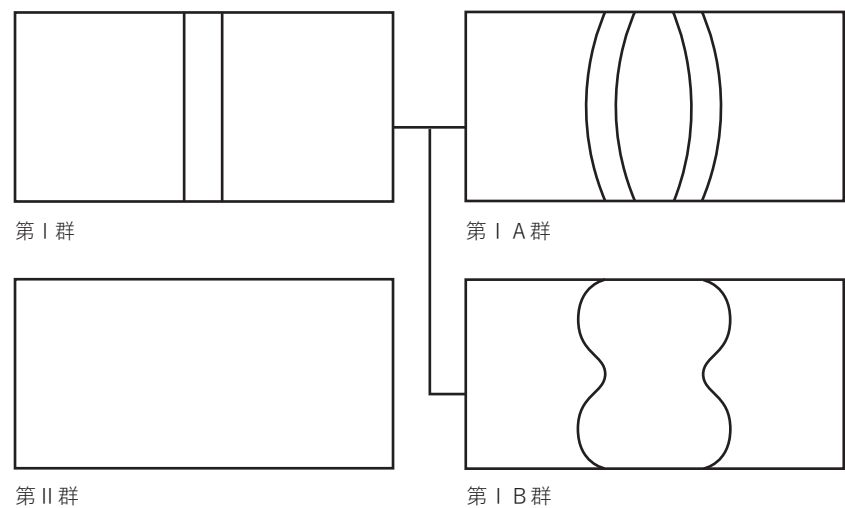
第2図 野島式土器



第3図 茅山下層式土器

前後型式の土器と図の鶴ガ島台式土器から抽出できる要素を以下に示す。

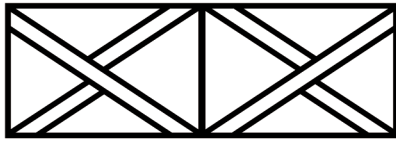
器形	・ 屈曲が緩い ・ 屈曲が強い	文様モチーフ (第 5 図)	a. 襷状文 b. 蕨手襷状文 c. 襷状文細分割 d. 蕨手襷状文細分割 e. 山形文 f. 山形文細分割 g. 山形文組合 h. 三角状文 i. 円弧文 j. 格子状文 k. 縦位状文 l. 横位状文 m. 重弧状連続文 n. 曲線文
口縁	・ 波状 ・ 平縁 ・ 環状把手		
文様帯構成 (第 4 図)	第 I 群 横位区画から垂下した縦位区画 があるもの 第 I A 群 縦位区画が楕円形のもの 第 I B 群 縦位区画が隆帯のもの 第 II 群 縦位区画がないもの		



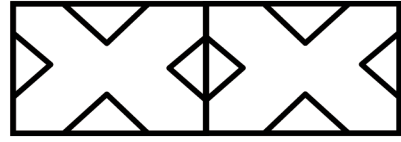
第 4 図 文様帯構成

第 1 表 施文手法

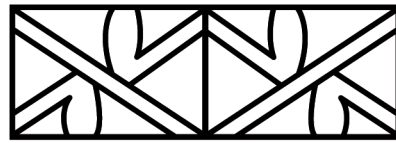
文様描線 \ 充填	異方向沈線	沈線	沈線 + 刺突	刺突
円形刺突	●	●	●	●
細隆起線	●	●		
沈線	●	●	●	●
細隆起線 + 沈線	●	●		
沈線 + 隆帯			●	●
刺突 + 隆帯			●	●
刺突				●



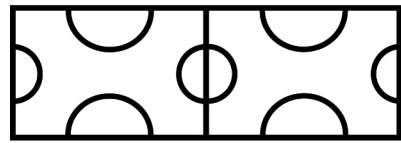
a. 襷状文



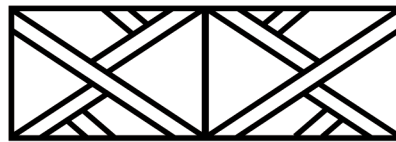
h. 三角状文



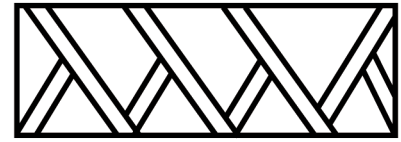
b. 蕨手襷状文



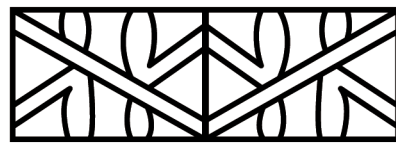
i. 弧線状文



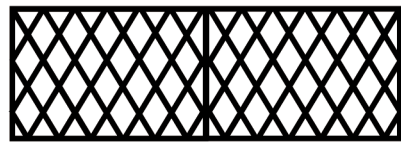
c. 襷状文細分割



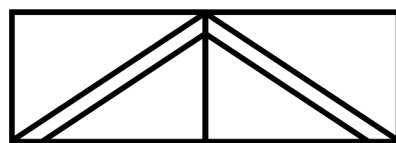
j. 入り組み文



d. 蕨手襷状文細分割



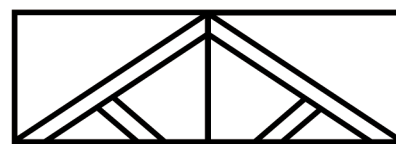
k. 格子状文



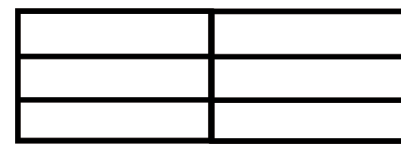
e. 山型文



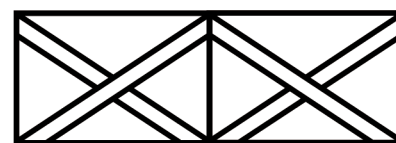
l. 縦位状文



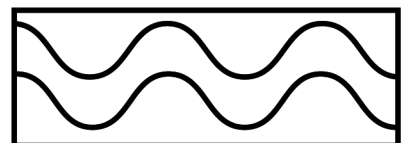
f. 山型文細分割



m. 横位状文



g. 山型文組合



n. 曲線状文

第5図 文様帯モチーフ

- 区画施文技法
- ・円形刺突
 - ・細隆起線
 - ・沈線
 - ・細隆起線＋沈線
 - ・沈線＋隆帯
 - ・刺突＋隆帯
 - ・刺突

- 充填施文技法
- ・異方向沈線
 - ・沈線
 - ・沈線＋刺突
 - ・刺突

2-1-2. 鵜ガ島台式土器の段階設定

また鵜ガ島台式のなかで長期間にまたがった遺跡で層位情報をもつ千葉県船橋市飛ノ台遺跡で出土した鵜ガ島台式土器を考える。(第6図)

1は4号小竪穴から出土している。1は緩い括れ、井桁状の文様モチーフを持ち、充填に太めの沈線が採用されている。野鳥式の要素を受け継いでいる。次に襷状文をもった2の土器は、1よりも屈曲部が強く、口縁部下I帯と胴部II帯が分かれている。文様モチーフは野鳥式を受け継ぐ襷状文が採用されているが充填には刻みをもっていることから野鳥式と茅山下層式両方の要素をもった土器だといえる。

3は緩い括れのI帯のみの土器で縦位区画をもち、充填には刻みを持っている。4は縦位区画を持ち、弧線状文が採用されており、充填には刻みが採用されている。特に4の土器は、1・2・3の土器がもつ無紋区画帯を持たないことが特徴である。

1は飛ノ台遺跡4号小竪穴から出土しており、2が出土した35炉穴Bと12号住居跡を介して切りあっており、層位的裏付けがなされている。3と4は45号炉穴の覆

土と焼土から出土しており、調査所見では4が炉穴焼土下、3が炉穴覆土下に出土していることから、4が古く3が新しいとされている。

以上、前後型式からの系統と層位情報を踏まえて、鵜ガ島台式のなかで野鳥式に近い要素を持つものを初期段階、茅山下層式に近い要素をもつものを最終段階、その過渡期にあたるものを中段階として設定する。

2-2. 口縁部文様帯の文様モチーフの系統変化

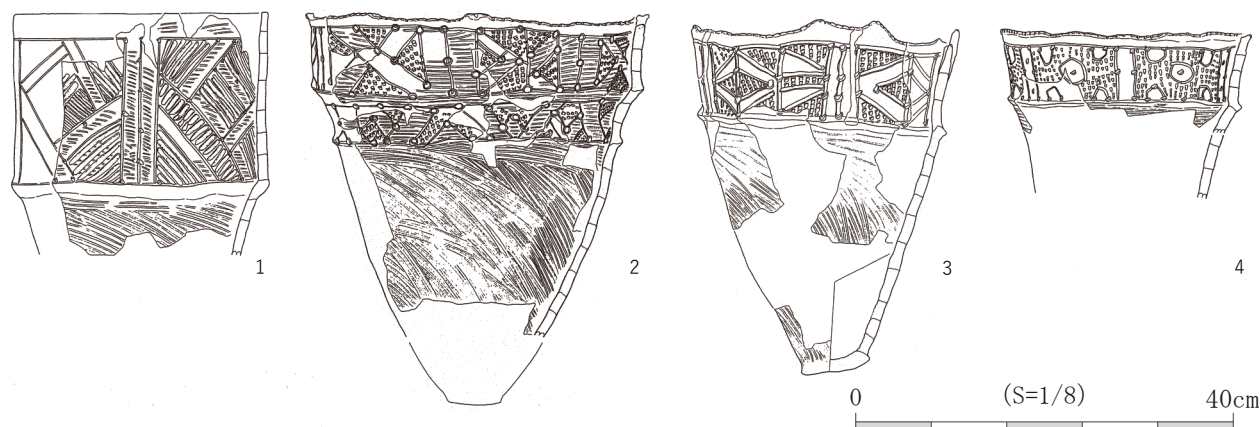
次に野鳥式からの流れを継ぐ鵜ガ島台式土器の文様モチーフにどのような系統が追えるか検討していきたい。

2-2-1. 初期段階

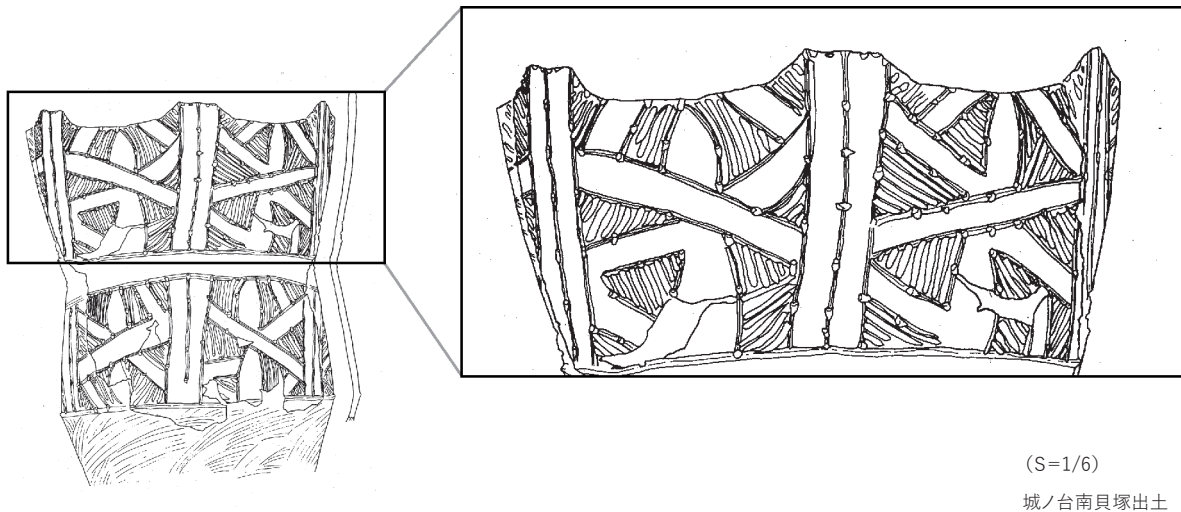
鵜ガ島台式の典型的な文様モチーフである襷状文は野鳥式から受け継がれたものである。初期段階は野鳥式のI帯とII帯を貫く縦位区画が消え、野鳥式終末段階の「縦位区画→横位区画」という施文順序から鵜ガ島台式1段階で「横位区画→縦位区画」という順に変化した⁽¹⁾。

襷状文を描写することで無紋の区画帯が生まれ、充填区画との差が生まれる。これが襷状文の無紋区画帯の施文効果である。また縦位区画は野鳥式から受け継がれてきた文様を単位で分けて単位ずつ文様を繰り返すという、文様モチーフの描写の上で起点となっている。

城ノ台南貝塚からこの第1段階の典型的な土器が出土している(第7図)。器形は緩い山形の波状口縁を呈し、二つの括れを有している。上部の括れは口縁部文様帯の下部と胴部文様帯の上部の一次区画に挟まれた無紋帯部にみられる。下部の括れは、胴部文様帯の下部一次区画にあたる部分にみられる。口縁部文様帯は、波頂部から垂下した3本の細隆起線が二次区画である。三本引く事で無紋の帯状区画を2本描写している。横位区画と縦位区画でわけられた部分を1単位として、内部に襷状文を細分割した文様モチーフを展開する。襷状の帯のうち、



第6図 飛ノ台遺跡出土の鵜ガ島台式土器



第7図 初期段階の文様帯構成

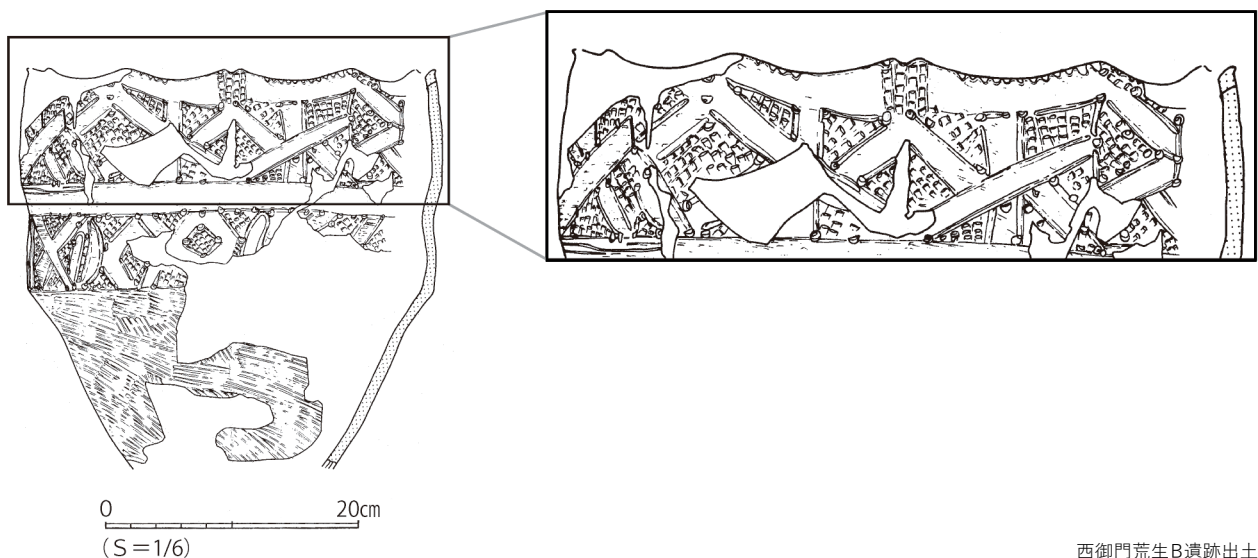
最初に施文したと思われる一本を分割する帯の下がり方が、隣り合う単位で左右逆になることも特徴である。図は右下がり→左下がりとなっているのがわかる。充填は帯状区画外に行われており、沈線紋が用いられている。

2-2-2. 中段階

この縦位区画が失われてできる文様が山形組合文である。縦位区画を起点として描写されてきた襷状文は、起点を失うことになる。起点なしに襷状文を順に描写することだけでは、単位を等間隔に合わせることが困難になる。縦位区画があった前段階の土器でも、苗ヶ島大畑遺跡出土の土器のように、4単位の文様モチーフのうち、3単位は等間隔、残りの1単位が狭くなって間の口縁突

起も省略されてしまうような現象が起きている。この段階になって縦位区画がなくなったことで円環的で等間隔な単位を繰り返すことが困難になる。

この山形組合文が採用されている土器の中でも代表的なのが千葉県西御門荒生B遺跡出土の土器である（第8図）。緩い波状口縁をもち、2段の括れを有するが、口縁部文様帯と胴部文様帯が胴部下位まで展開していたものが胴部中位まで縮小されている。ゆえに前述の城ノ台南貝塚出土の土器とは違い、土器の高さに比べて口縁部の径の割合が大きく見える。無紋の縦位区画が消え、口縁部文様帯の文様帯内の襷状文のうち、斜めに下がる帯状の無紋帯が横位区画に接する事が出来ず浮いている。図左には、省略されてしまった単位が確認できる。



第8図 中段階の文様帯構成

2-2-3. 中段階-2

縦位区画を失った無紋の区画帯は、起点を失い施文が難しいため、先に横位区画に接している箇所を起点とし施文区画を描写することで無紋帯を描写しようとするものがでてくる。この無紋帯を描写する動作の切り替わりで帯状区画が崩壊する。

神谷原遺跡出土の土器は、波状口縁をもち、波頂部が楕円形を呈しているのが確認できる（第9図）。

口縁は胴部より広がり、この土器の特徴を表している。口縁部下の口縁部文様帯をみると、それまでの襷状文とは違うのがわかる。波頂部下に二つの三角形の施文区画を描写し、無紋帯をつくるために、ひし形の施文区画を描写している。上部横位区画に癒着した三角形の施文区画の下に、下部横位区画に癒着した三角形を描写している。その結果、無紋区画が浮かび上がるのだが、前段階の襷状の帯状区画とは性質が異なっている。下部の一次

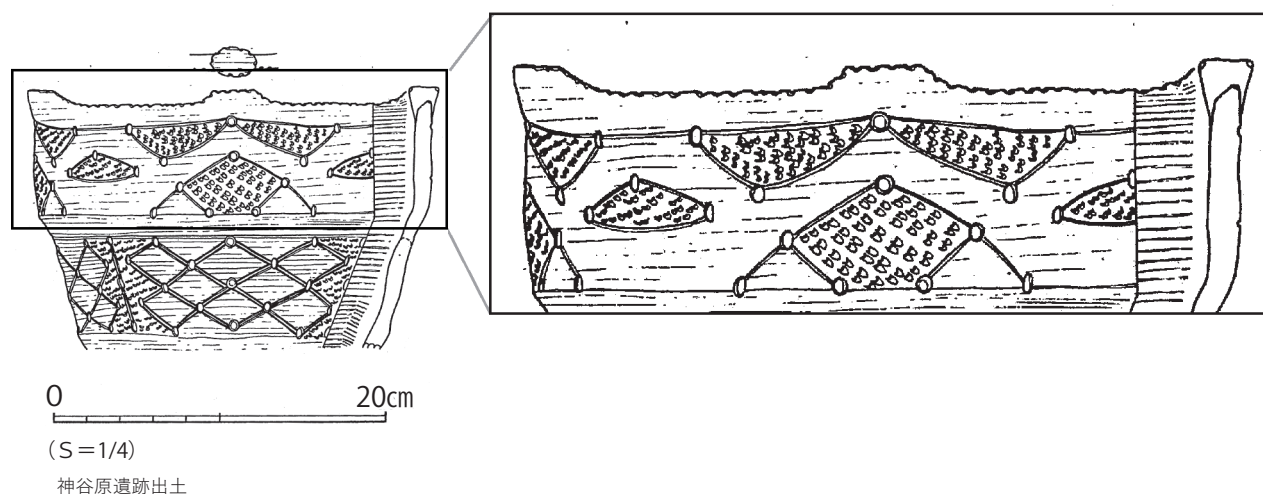
区画に癒着した三角形区画が、中央部のひし形施文区画と接し、結果的に無文区画が消えている。無文の帯状区画はここで失われる。

2-2-4. 終末段階

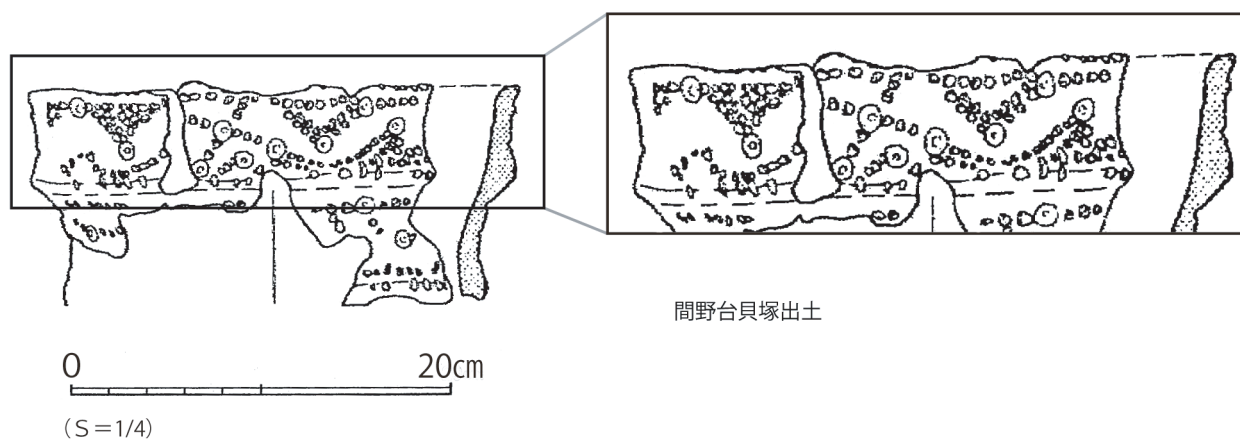
次の茅山下層式へと続いていく最終段階では、単位概念もかなり曖昧になる。縦位区画がなくなったことで横に広く展開するモチーフがこの段階になって目立つ。

間野台貝塚出土の土器は、曲線文が描かれている（第10図）。上部に横位区画に癒着した三角形の充填区画が認められるが、内部に充填がないものもみられる。下部の横位区画に癒着する区画はかなり崩れ三角形ではなくなっているところもある。文様帯の中央部は曲線的に横に展開しており、今までの文様モチーフとはちがう新しい要素が生まれている。

ここで確認しておきたいことは、この系統内での変化



第9図 中段階-2の文様帯構成



第10図 終末段階の文様帯構成

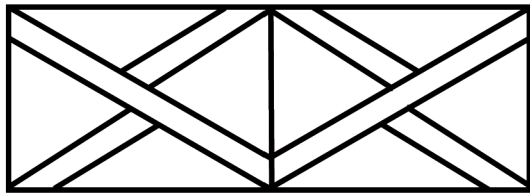
が必ずしも時間差を示すものではなく、特に中間段階と終末段階は同時併存の可能性を有している。

3. 鵜ガ島台式土器の細分案

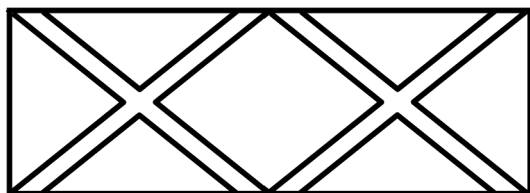
前章で述べた分類項目と系統関係を組み合わせて、細分案を提示したい。

3-1. 初期段階

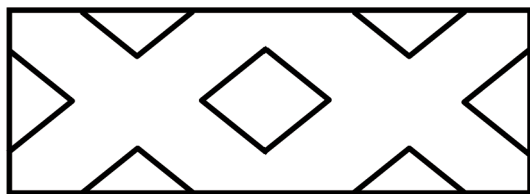
初期段階の土器は、第Ⅰ群によって構成される。文様モチーフとしては、a. 襷状文、c. 襷状文細分割、b. 蕨手襷状文、d. 蕨手襷状文細分割があげられ（鈴木 1998）、区画交差部に竹管刺突紋や円形刺突紋が施される。稀に格子状文も見受けられる。胴部文様帯は、胴中位から胴下位に展開する。また、区画は細隆起線紋や沈線紋で施文され、太めの沈線で充填される。器形は、野島式期の緩い括れが上下帯の分離によって強くなっている。口縁



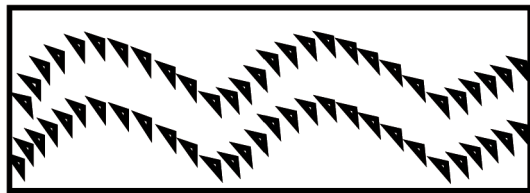
初期段階



中段階



中段階-2



終末段階

第 11 図 文様帯構成の変遷

は平縁のもの、波状口縁のものがある。口縁部に刻みをもつものもある。

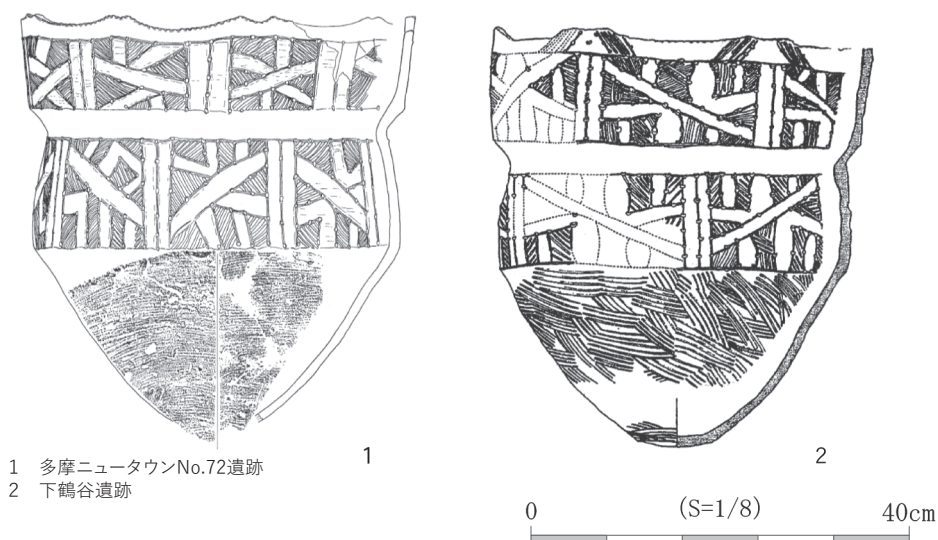
これに該当するものは、多摩ニュータウン No.72 遺跡出土の土器である。波状口縁を呈し、二段の括れを持っている。口縁部文様帯は横位区画をひき、縦位区画を描写するため、三本の細隆起線を上部の横位区画と下部の横位区画を連結するようにひいている。この三本の垂下する線によって描写する縦位区画は、その後の鵜ガ島台式終末段階まで継続するものである。この土器の襷状文は、最初にひく带状区画が右下がり、となりの単位は左下がりとなっている。口縁部文様帯の内、向かって右の単位は、左下がりの带状区画を挟んできれいに襷状にもう二つの带状区画が交わっているように見えるが、向かって左の単位は、右下がりの带状区画を挟んで2つの带状区画がずれている。

無紋帯を挟んである胴部文様帯は、口縁部文様帯と同様に横位区画と縦位区画が確認できる。口縁部文様帯と同じ襷状文だが、比較すると1単位のなかに縦位の带状区画が増える。胴部文様帯でははっきりと縦位区画と斜めの带状区画が癒着し、蕨手状文のようにになっているのがわかる。充填区画は太い沈線紋で充填されている。区画の交差部などには円形刺突紋が施文される⁽²⁾。

3-2. 中段階

中段階の土器は、第Ⅰ群と第Ⅱ群、第Ⅲ群によって構成される。第Ⅱ群は縦位区画をもたないものである。文様モチーフは第Ⅰ段階のものに加え、襷状文から変化したと思われる e. 山形文と f. 山形文細分割、g. 山形組合文が挙げられる。区画は第Ⅰ段階と同様に細隆起線文や沈線文が用いられ、区画交差部に円形刺突紋が施される。充填には、沈線のほかに押し引き文が用いられることも大きな特徴である。また、初期段階と比べ、胴部文様帯の幅が縮小し文様帯の下部が胴中位に展開するようになっている。

多摩ニュータウン No.72 遺跡の出土土器は、平らな口縁をもつ（第 12 図-1）。口縁部文様帯は下に線を三本降ろして带状の無紋区画を2本描写し、これが縦位区画となる。これは初期段階から続くものである。带状区画の下の区画描写線は、縦位区画を起点にして下部の横位区画のちょうど単位の中心にあたる場所に斜めに降ろし、上のもう一本の区画描写線は横位区画を起点にして斜めに降ろしている。2本の描写線共に、起点をもとに描きしっかりと带状区画を配置している。反対側の縦位区画と横位区画とを起点にして同様に単位の中心にむかって斜めに下りる带状区画があり、ちょうど鋸刃状になっていることが確認できる。鋸刃状に二つの斜めの帯



1 多摩ニュータウンNo.72遺跡
2 下鶴谷遺跡

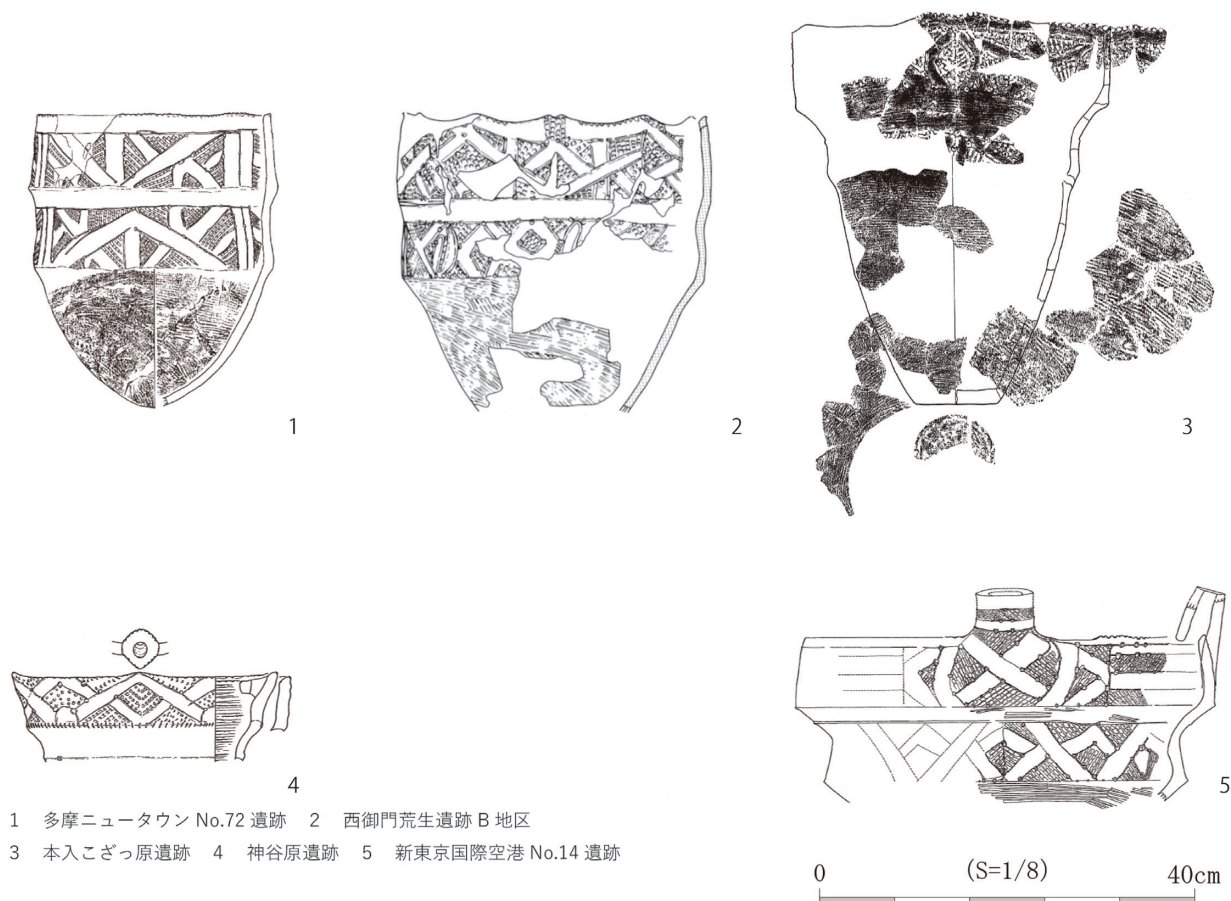
第 12 図 初期段階の鵜ガ島台式土器

状区画が交わっている部分にまた線を 2 本垂下させて縦位の無紋区画を描写しているが、こちらは単位を区切る縦位区画の役割を果たしていない。斜めの帯状区画に対して上部は襷状になるように先の縦位の無紋区画を起点として、無紋の帯状区画を配する。しかし下部は蕨手状の無紋区画を採用している。胴部文様帯は口縁部文様帯とは逆に単位を中心から両端の縦位区画に向かって斜めに帯状区画を描写しており、鋸刃状ではなく山形状になっているのがわかる。このように山形状のモチーフ(山形文)は、襷状文から帯状で無紋の縦位区画が省略されたことにより変化した文様モチーフといえる。充填は刺突文が採用されており、新しい施文要素が加わっている。区画交差部には円形刺突文が施文される。2 の西御門荒生 B 遺跡出土の土器でも山形文を確認できる。ゆるい波状の口縁をもち、胴中位まで文様帯が展開している。こちらは単位を区分する機能を持つ帯状で無紋の縦位区画が消え、沈線での縦位区画がなされるだけとなっている。また、向かって左の部分は山形文の左に降りる帯状区画が途中で途切れ、単位の中の文様が省略されていることが確認できる。充填は刺突文が用いられている。区画交差部に円形刺突文が施文される。円弧状の無紋区画が認められるのは本入こざっ原遺跡出土の土器である(第 13 図)。

ゆるい波状口縁をもち、口縁と口縁部文様帯部分の径が大きいのにに対して、口縁部文様帯部で括れると、無文帯から胴部文様帯部分にかけては径が小さくなる。この段階のほかの土器と比べ、口縁部文様帯部での括れがかなり強くなっている。先の口縁部文様帯部の縦位の沈線と同じようなものがこの土器でも確認できる。沈線の周りには円弧状の無紋区画が配され、それ以前には見られない新しい要素であると言える。

中段階の土器の中でも、口縁部文様帯と胴部文様帯に異なる文様帯を採用するようになるものがある。胴部文様帯に流入してくる文様モチーフとしては、j. 格子状文、k. 縦位状文などが文様モチーフとして現れる。これらの土器の中では、文様帯内において縦位区画によってわけられた 1 単位が横位に連続していたものが、縦位区画が消失したことによってまるで連鎖しているようにみえるものがあらわれる。また、そのような上下に異なる文様帯を採用する土器の器形においては平縁、波状口縁に加え、波頂部に環状把手を持つものが表れ、把手下に 1 単位の襷状文を楕円上の縦位分割が囲むような特殊な文様モチーフも認められる。環状把手に関しては鈴木啓介が触れ(鈴木 1998)、野内秀明が言及している(野内 2001)。器形では、2 段の括れを有し、初期段階よりも強く屈曲するようになるものがあらわれる。区画は沈線で施され、充填には刺突紋も採用されるようになる。

このような土器にあたるのは新東京国際空港 No.14 遺跡出土の土器である(第 13 図)。把手中央部を挟んで X 字状文を施文し、それを弧状の無紋区画で挟んでいる。弧状文の横は、くの字状の無紋区画がある。くの字は縦位の沈線で折り返しているのが確認でき、この文様帯の単位は沈線で区切られている。把手下の文様単位に隣り合う単位文は、横位の区画描線で、長方形の無紋区画と施文区画が描かれている。同一の文様帯内にいくつかのモチーフの採用を促したのは、環状把手の作用であるところが多い。それまで、隣り合う単位を線対称的に繰り返してきた鵜ガ島台式の文様帯に変化が起きた契機といえる。また把手にも区画描線が横位に描かれ、環状把手を廻る充填区画と無紋区画にわかれている。充填は押引紋が採用され、区画交差部には円形刺突紋が施文されている。



1 多摩ニュータウン No.72 遺跡 2 西御門荒生遺跡 B 地区
3 本入こざっ原遺跡 4 神谷原遺跡 5 新東京国際空港 No.14 遺跡

第 13 図 中段階の鵜ガ島台式土器

中段階において特徴的な弧線文は横位区画に癒着し、無文区画を描写する起点として新しく生まれたと考えられる。野内は、この起点としての弧線文の発生は、単位を分割した際に、単位分割面が横長になったことに起因されると述べた。また、「弧状文は文様帯分割面内の文様割り付けの起点としての機能をもって成立したと思われることから、他の文様に対して先行施文される」とも述べている（野内 2001）。

縦位区画が失われたことにより、単位分割に沈線が採用され、1 単位が横長になったことに加え、同時に文様帯モチーフの施文の起点が失われたこととなり、带状区画の施文が困難になったことが「横位区画に癒着した起点としての弧線文」発生の一因だと考えられる。

この弧線文が確認できるのが、神谷原遺跡出土の土器である（第 13 図）。きわめて緩い波状口縁を呈しており、2 段の強い括れを有し、括れ部には刻みが確認できる。口縁部文様帯において、縦位区画は消失しており、沈線による単位分割も見られない。下部の横位区画に癒着した弧線文を配置して、その弧線文を連結するように斜めの区画描写線が描かれ、鋸歯状と山形状を繰り返す带状区画を描いている。この带状区画をクロスさせて、X 字状になるように 2 本の带状区画を描いているのだが、上

部の横位区画に癒着した起点はなく、文様帯中央にひし形の施文区画が浮いているように見えるのも特徴である。

3-3. 終末段階

終末段階では、文様モチーフが曲線的になる。l. 縦位状文、m. 横位状文や n. 曲線文が新たにあらわれる。また、区画文の施文に刺突文が採用されるようになる。曲線的な文様モチーフの出現に伴い細隆起線による区画を行うものもある。その細隆起線による区画分けを指でなぞる事で模倣したと考えられる凹線紋がこの段階の大きな特徴として挙げられる。従来は茅山下層式期の新たなモチーフだとされていたが、桜井平遺跡の住居址にて、鵜ガ島台式から茅山下層式の過渡期に区画交差部の円形刺突文と凹線文が同時に確認できる土器が確認できたため、本稿では終末段階の施文方法として分類した。また、区画内を充填するものと充填を行わないものとに分かれる。

縦位区画には細隆起線区画と凹線文区画の土器において、隆帯により分割される。隆帯上には円弧状モチーフが採用される。刺突文による区画が採用された土器は縦区画が用いられない特徴がみられる。

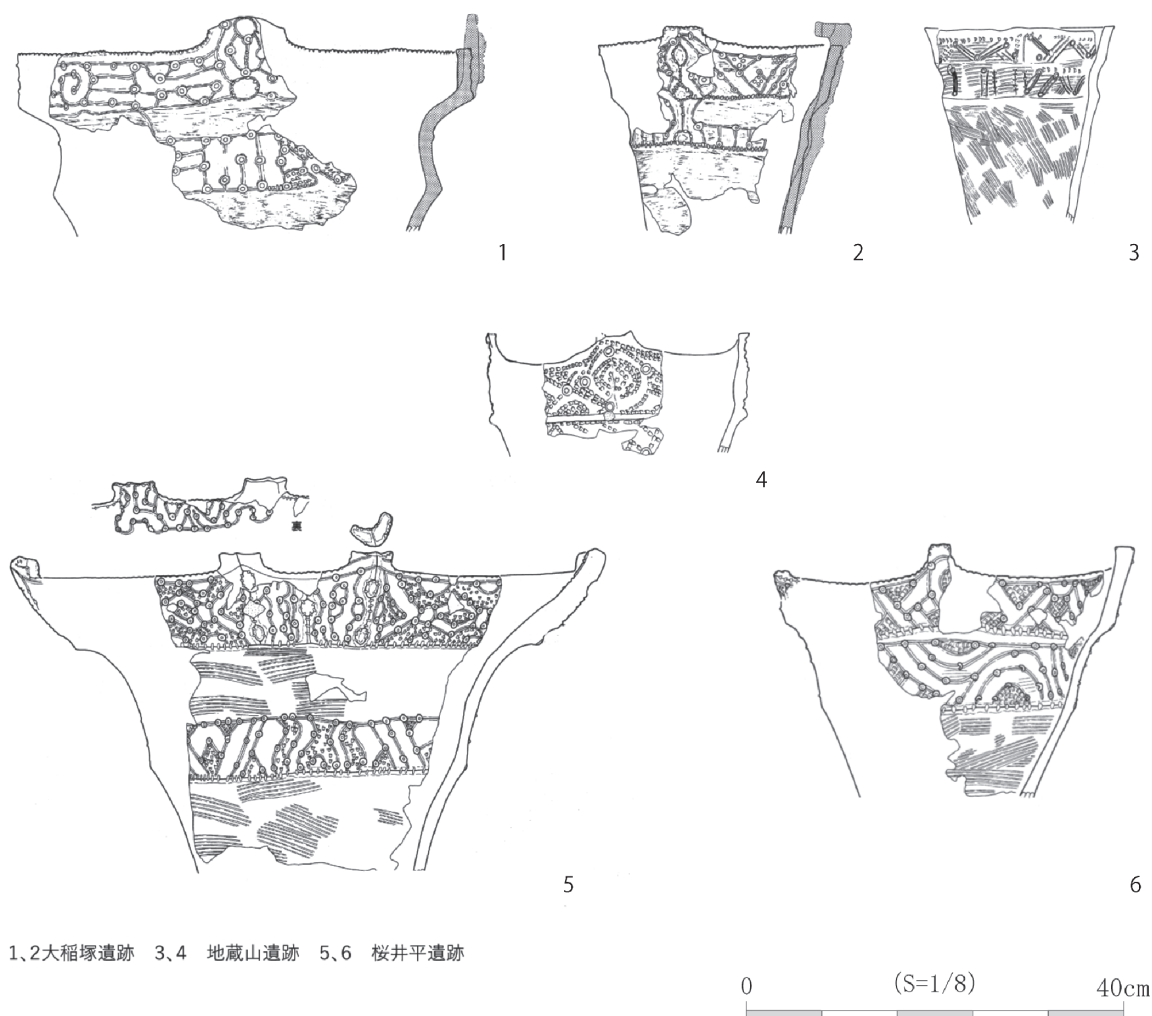
この段階の特徴的な土器は大稲塚遺跡出土土器であ

る（第14図-1）。002号炉穴出土である。台形把手を持ち、二段の括れは屈曲が強い。口縁部文様帯と胴部文様帯はそれまでの段階と違い、文様帯の幅が縮小している。台形把手には隆帯が張り付けられ、縦位の縦位区画の役割を果たしている。前段階の狭間貝塚出土の土器のように円弧状のモチーフを上下に配し、垂下する刻み文で連結している。隆帯を囲むように楕円形の带状区画が描写している。この楕円上带状区画を対弧文とする（野内2001）。口縁部文様帯では斜行する带状区画はなく、横位の沈線や弧線状文、渦巻き状のモチーフが展開している。従来の襷状文から山形文へと変化していった直線的なモチーフが、带状区画を失い、弧線状文などの発生、そして文様帯の幅の縮小により曲線的に変容したものだと考えられる。特徴的な点としては、区画の概念が変容したことで施文区画もなくなり、充填がなされていない。胴部文様帯は、縦位状のモチーフ（縦位状線文）と横位状のモチーフ（横位状線文）が組み合わさっている。しかし残存部が少ない右の単位文には別のモチーフが認め

られ、少なくとも三つのモチーフを同一文様帯に採用している。またこの右の単位文にはこの土器の中で充填がある。充填はまばらで刻み紋が用いられている。

同遺跡024号炉穴出土の2の土器は、同じく台状把手を持つ。また隆帯による区画を持つが、前段階の特徴であると思われる口縁部文様帯と胴部文様帯の円弧状文を、無紋帯を貫くようにして刻み紋で連結している。口縁部文様帯には、襷状文や山形文の系譜をひく直線的な带状区画が描写されている。この段階で曲線的なモチーフだけでなく、伝統的で直線的なモチーフが残っているとわかる例である。胴部文様帯は口縁部文様帯よりも幅が縮小されているからか、幅が狭くても表現できる縦位状線文を採用している。

地藏山遺跡出土の土器は、带状区画が失われている例として挙げられ、後続の茅山下層式に続く過渡期の遺跡である。直線的な文様モチーフと、曲線的なモチーフが存在し、単独で描くものと複合して描かれるものがある（野内2001）。



1、2大稲塚遺跡 3、4 地藏山遺跡 5、6 桜井平遺跡

第14図 終末段階の鵜ガ島台式土器

単独で採用しているものは第14図に示した土器である。口縁部文様帯は起点となる区画も存在せず、円形刺突紋を上下に交互に配し、直線的な沈線で結び、山形状モチーフを描いている。

複合して描写される文様モチーフをもつのは同遺跡出土の土器（第14図）である。波状口縁を持ち、括れは前段階の土器と違って緩くなっている。下部の横位区画に接するように弧線状文を描き、それを囲うように直線的な刻み文が三角形に描写している。波頂部下には、円弧状のモチーフが大きく刻み文で描写され、間に空白を挟んで刻み紋を一周させている。この円弧状のモチーフもこの段階になって新しく鵜ガ島台式に見られるようになった要素である。

施文区画部に充填される土器は減少するが残っており、桜井平遺跡出土の土器がこれらにあたる（第14図）。

5の土器は把手部に隆帯をもち、円弧状のモチーフが上下に並ぶ。弧線状文が起点としてではなく完全にモチーフ化しているのが確認できる。円弧状文、ひし形状のモチーフが無文区画となっており、充填している1本の帯状の施文区画が蛇行するように描写されている。区

画が交差する部分が少なく、円形刺突文は区画交差部ではなく区画描線の屈曲する部分やそれ以外の部分にも施文している。II帯は斜行や蛇行する縦位状文が確認できる。

5. 段階別の遺跡

初期段階に比定できる遺跡は、南関東、静岡県、長野県に広がっている。

生業としては陥し穴などの罟を利用した狩猟、磨石や敲石などが見つかることから堅果類の採集活動をおこなっていることが示唆されてきた。

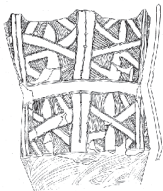
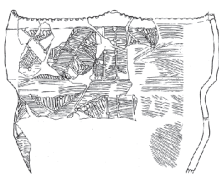
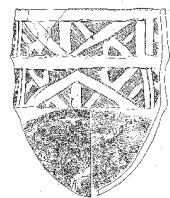
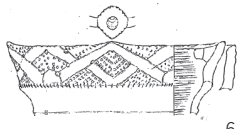
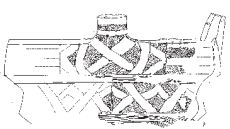
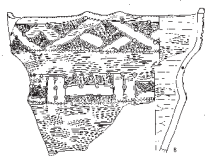
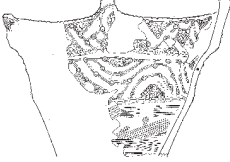
今まで定住性が唱えられてきたものの、鵜ガ島台式期の住居が伴う遺跡は少ない。その中でも長野県上の山遺跡では、住居址から鵜ガ島台式が認められ、他の3軒の住居址からも内外面に条痕施文を持つ土器が発見されている。

また、野島式と鵜ガ島台式期の過渡期とみられる多摩ニュータウンNo.351遺跡でも例が見られるが、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画分けされ、上位区画が口縁部

第2表 各段階の遺跡

第1段階				第3段階	
遺跡名	所在	遺跡名	所在	遺跡名	所在
大庭城址公園内遺跡	神奈川県	十余三稲荷峰西遺跡	千葉県	本入こざつ原	神奈川県
本入遺跡	神奈川県	三輪野山遺跡	千葉県	都筑自然公園遺跡群	神奈川県
山王山遺跡	神奈川県	東峰御幸畑東遺跡	千葉県	新戸遺跡	神奈川県
杉久保蓮谷遺跡	神奈川県	大袋山王第2遺跡B地区	千葉県	宇津木向原遺跡	東京都
大入遺跡	神奈川県	先崎西原遺跡	千葉県	恋ヶ窪東遺跡	東京都
平台北遺跡群	神奈川県	新東京国際空港No.68遺跡	千葉県	多摩ニュータウンNo.432・907・908遺跡	東京都
鳶尾遺跡	神奈川県	飛ノ台遺跡	千葉県	指浜遺跡	茨城県
上浜田遺跡	神奈川県	三里塚No.14遺跡	千葉県	式ト込遺跡	千葉県
沼間ポンプ地遺跡	神奈川県	駒込遺跡	千葉県	大庭辰巳ヶ原遺跡	千葉県
羽沼第11遺跡	神奈川県	下鶴谷遺跡	群馬県	新東京国際空港No.14遺跡	千葉県
多摩ニュータウンNo.72遺跡	東京都	下原遺跡	栃木県	西御門荒生B遺跡	千葉県
多摩ニュータウンNo.962遺跡	東京都	塚田遺跡	長野県	鷺谷津遺跡	千葉県
多摩ニュータウンNo.52遺跡	東京都	樋沢遺跡	長野県	草刈遺跡	千葉県
多摩ニュータウンNo. 962遺跡	東京都	上の山遺跡	長野県	山王台遺跡	千葉県
新東京国際空港No.7遺跡	千葉県	大久保南遺跡	長野県	名木鎌部北遺跡	千葉県
新東京国際空港No.14遺跡	千葉県	加茂の洞B遺跡	静岡県	玉川金山遺跡	山梨県
城之台南貝塚	千葉県	イタドリ遺跡	静岡県	美通遺跡D区	山梨県

第2段階				第4段階	
遺跡名	所在	遺跡名	所在	遺跡名	所在
本入こざつ原遺跡	神奈川県	細原遺跡	茨城県	鵜ガ島台遺跡	神奈川県
師岡打越遺跡	神奈川県	石場遺跡	千葉県	茅山貝塚	神奈川県
梶山北遺跡	神奈川県	西御門荒生遺跡B地区	千葉県	熊ヶ谷遺跡	神奈川県
宮の原貝塚	神奈川県	村東山手遺跡	長野県	狭間貝塚	茨城県
オオデラ遺跡	神奈川県	大久保南遺跡	長野県	奥山C遺跡	茨城県
小坪小学校裏山遺跡	神奈川県	塚田遺跡	長野県	桜井平遺跡	千葉県
磯子台遺跡	神奈川県	下荒田遺跡	長野県	間野台遺跡	千葉県
御嶽堂遺跡	東京都	加茂ノ洞B遺跡	静岡県	上座遺跡	千葉県
多摩ニュータウンNo.72遺跡	東京都	富士石遺跡	静岡県	大稲塚遺跡	千葉県
				山崎貝塚	千葉県
				地藏山遺跡	千葉県
				先崎西原遺跡	千葉県
				鎌取遺跡	千葉県
				鎌沢遺跡	静岡県

	鵜ガ島台式土器 編年表	
初期段階	 1  2	
中段階	 3  4  5	
	 6  7  8	
終末段階	 9  10  11	
	 12  13	

第 15 図 鵜ガ島台式土器の細分編年

文様帯と胴部文様帯を貫いている。

前型式の野島式の段階では、武蔵野台地、下総台地、多摩丘陵、相模野台地、長野県では伊那谷、静岡県では愛鷹山麓に広がっていた。野島式・茅山下層式が近接した層で出土する遺跡でも鶴ガ島台式が空白期として出土しない遺跡もあるため、一概に一致するとは言えないが、鶴ガ島台式の広がり、野島式が出土した遺跡の分布を比較すると、多くが重なっていることがわかる。

下鶴谷遺跡と多摩ニュータウン No.72 遺跡は、この段階で極めて共通する文様帯モチーフを持っていると言える。

1 は、先に述べた多摩ニュータウン No.72 遺跡出土の土器である。2 は、群馬県下鶴谷遺跡出土の土器で、蕨手襷状文細分割が採用され、波頂部下の無文帯には斜行する直線的な文様が描かれているのが特徴的である。胴部文様帯も口縁部文様帯と同様の文様モチーフを採用しており、口縁部文様帯と同様に胴部文様帯の文様モチーフを半単位ずらしている。

中間段階には南関東を中心に長野県静岡県山梨県に広がる。神奈川県と静岡県にわたって位置する相模野台地に集中している。

都留市は山梨県東部地域に当たり、山間部と谷筋を流れる川が形成する河岸段丘と低地部で構成される。遺跡はこの川沿いに広がり、玉川金山遺跡も戸沢川と菅野川の合流地点付近に位置し、鶴ガ島台式が出土した地点は傾斜が強い山地に近い。

茅山下層式へと続くこの段階は千葉県北部において出土例が多い。神奈川県では、鶴ガ島台遺跡、茅山貝塚、横浜市に位置する熊ヶ谷遺跡の3遺跡で確認される。

6. 考察

本稿ではまず最初に鶴ガ島台式の前後型式である野島式と茅山下層式を鶴ガ島台式と比較し、野島式から続く初期段階と、茅山下層式へと繋がる終末段階を設定した。また、現状では少ない遺構の切りあい関係から鶴ガ島台式内の初期段階と終末段階の間にある中段階を設定した。

次に、口縁部文様帯に図像的アプローチをし、文様帯構成の変遷を分析した。文様帯構成の変遷が、文様帯モチーフの増加に関係することがわかった。

次に、文様帯構成の変遷、施文方法、文様帯モチーフを合わせて検討し細分案を提示した。伝統的な襷状文を継承する初期段階には、細隆起線や沈線など施文方法においても野島式から続くものを用いていることがわかった。中段階には、新たな文様帯モチーフが加わるが、そ

れまで見られなかった刻みなどの施文方法を採用している。器形においても、波状・平縁に加えて、環状把手がみられるようになった。終末段階では、曲線的な文様帯モチーフが増加するとともに、指頭を用いて細隆起線を模倣するような新たな施文方法を採用している。これまで、粗雑化の傾向にあるとされてきた鶴ガ島台式だが、実際にはその系統ごとにしっかりと文様帯モチーフの施文意識を統制していたといえる。文様帯モチーフの変化が、施文方法の変化とも一致してくることがわかった。

細分案の終末段階には、単位の小波状口縁に垂下する隆帯に2個ないし1個の円状の凹みを持つ特徴的な文様を持つ土器群がある。波状下の隆帯は文様を分割しており、刻みが入っているものもある。この土器群は桜井平遺跡で集中的に出土しており、「桜井平遺跡ではこの波状下の円状の凹みは凹線文に特有の文様であるとみられる。」と報文内で述べられている（蜂屋 1998）。従来のモチーフが機能を失いつつも文様モチーフとして残存し、既存の文様と複合して描写されていることがわかる。

茅山下層式に出現したとされているが、指頭をつかった凹線文は、桜井平遺跡ですでに鶴ガ島台式終末段階の土器に現れている。関野から続く凹線文が茅山下層式のメルクマールになるというのは難しく、凹線文を伴う鶴ガ島台式土器があるということは強調しておきたい。ただ桜井平遺跡出土では、それほど鶴ガ島台式と茅山下層式の間に時期差があるものではないだろうとされている。

次に、その細分案をもとに遺跡を段階ごとに分けた。段階ごとに遺跡を分けた際の、複数段階に及ぶ遺跡数は少ない。野島式、茅山上層式など、前後型式の土器が確認できる遺跡はあり、標識遺跡である鶴ガ島台遺跡、千葉県に所在する飛ノ台貝塚、第1段階・第2段階に及ぶ多摩ニュータウン No.72 遺跡、茅山下層式への変遷を追える桜井平貝塚などがあげられる。

従来唱えられてきた定住性だが、複数段階をまたぎ、継続して営まれた遺跡は割合として少ない。住居址も少なく、早期における人々の暮らしは、中期や晩期の様に長期間同じところにとどまるというものではなかったようである。

初期段階の遺跡分布は、相模川流域の低地と、甲府盆地につながる低地を通り移動していたことがみえてくる。甲府盆地を経由して八ヶ岳山麓を通り、伊那谷にも鶴ガ島台式が広まっている。

中段階においては、山梨県都留市長野県では上林中道南遺跡や下荒田遺跡などに胎土や文様モチーフなど地域性が見られる土器群出土している。現状の遺跡分布では、箱根山系の北部の低地を通じて山梨県都留市の方へ土器

が広がっていったことが考えられる。

相模川上流に遺跡が確認でき、千葉県北部、多摩、相模野台地に遺跡が見られる。また、茨城県にまで鶴ガ島台式が出土しており、水戸市のあたりまで進出している。

終末段階では、三浦半島に2遺跡確認できるが、総じて印旛沼・利根川流域に遺跡が集中していて、しかもごく近い距離に遺跡が確認でき、住居址も確認できる。

また、貝塚遺跡が多いのもこの段階の特徴であり（山崎貝塚・狭間貝塚・茅山貝塚・上座遺跡・間野台貝塚など）、貝塚が形成されるような期間、一定の箇所に居住していたことがうかがえ、また後続の型式の茅山下層式を伴う遺跡が多いことから、型式をまたぎ定住化が進んでいたことが推察される。

おわりに

本稿では鶴ガ島台式の系統を分析した。そして遺跡を段階別で提示し、当時の土器政策集団の活動範囲をとらえるために、鈴木啓介編年をもとに細別案をまとめた。

文様モチーフの変遷については、これまでの先行研究では野島式から鶴ガ島台式が成立した過程や、茅山下層式への過渡期の鶴ガ島台式の文様変遷が論じられてきたが、鶴ガ島台式内での文様帯を含む系統に関する論を進めているものは、主に1遺跡内での検証に留まっており、十分とは言えなかった。そこで今回、施文方法や文様モチーフ単体ではなく系統を組み合わせたうえで新たな細分案を提示した。おおむね鈴木啓介編年案に沿い、段階を3つ設定した。

今回の細分案では、口縁部文様帯に着目し、次に施文具を見ながら段階を設定した。胴部文様帯に口縁部文様帯とは違う別のモチーフがはいってくる段階を一つの画期ととらえ、施文具との組み合わせで中段階に設定した。ある程度実用性のある細分案を提示できたように思う。

今後は、本稿の分類項目と細別案を活用して、北関東、東北、中部、東海と広い地域を見ていき、これまで円形刺突文のみを指標として鶴ガ島台式と報告されてきた土器群の系統を追うことで、当時の土器制作集団の地域間の交流や生活圏を明らかにしていく。

註

- (1) 施文の順序が野島式と鶴ガ島台式で異なることはこれまで示唆されてきたが、その原理は未だに唱えられていない。口縁部文様帯と胴部文様帯の分離を重要視した結果、縦位区画を先に描写すると、文様帯の幅が縦位区画描写線の長さで決まり、施文が困難になった結果ではないかと推測しているが、今後検討していきたい。
- (2) 上下に異なる文様帯を採用しはじめる原理に関しては註の折衷土器の影響が強いと思われる。文様モチーフ分類の格子状文は、鶴ガ島台式初期段階の多摩ニュータウンNo.740遺跡や新東京国際空港No.14遺跡出土の土器で口縁部文様帯に採用されているものである。また縦位状文や横位状文は、茨城県石岡市にある三浦地蔵窪貝塚で口縁部文様帯に採用されているものが出土している。格子状文は特に相伴する鶴ガ島台式と文様構成を比べると当該期では顕著な無文区画帯を持たないという点でもかなり異質であったと考えられる。また、これらの文様モチーフが中段階になると口縁部文様帯には採用されず胴部文様帯に採用されるようになることも、この文様帯が伝統的な鶴ガ島台式の系統を別にするものと意識された結果である。同段階における、異なる文様帯の土器を製作する土器製作集団間の交流については、今後さらに検証する。
- (3) 桜井平貝塚は、下総台地に位置し鶴ガ島台式期の貝層が確認された。千葉県香取市干潟町にあり、椿海低地と椿海低地から西方向に伸びる谷によって南北を挟まれた台地上に立地している。東西はやせ尾根によって隣接した台地とつながっているがほぼ独立した台地である。鶴ガ島台式期の住居8棟が検出されている。時期は鶴ガ島台式期の中葉から末葉と見られている。台地上の中央部にまとまりが認められる。竪穴の構造は、円形、方形、不正系のものがあり、ほか遺跡の隅丸方形のものと比べると住居構造が一定しておらず不安定である。炉跡を伴うものが一棟のみで桜井平遺跡では住居に炉を設けないのが一般的である。住居址周辺には炉穴が認められ、炉穴群はこの住居址に伴うものと思われる。焼土跡を周囲に伴う田戸上層式期の住居址2棟は調査区北部、鶴ガ島台式期の住居址は調査区中央部に位置しており、居住区が移動していることが窺える。また、住居址から出土する鶴ガ島台式末葉の土器群と貝層から出土する鶴ガ島台式土器は型式上差異が認められており、貝層形成期と住居址利用期がずれている可能性を示唆している。また田戸上層式のあと遺構が検出されず断絶しているのは、野島式から鶴ガ島台式期にかけての遺構が古墳時代以降の激しい攪乱によって失われているこ

とも考えられる。しかし、遺構外から出土したのは野島式直前期から続く金子の編年によると野島1式の土器群であり、野島2式は見られない。

住居址と炉穴群の多さから定住していたことが考えられる。土器の器形も大型なものが多い。焼土跡は332基、炉穴114基、時期不明な土坑は122基である。616号の竪穴と610号の竪穴の切り合い関係がみとめられており、どちらも鵜ガ島台式末葉の土器が出土したことから、短期間に炉穴と竪穴が構築されたとみられる。

この遺跡は、豊富な一括資料に恵まれており、今後の研究において非常に重要である。

引用・参考文献

- 赤星直忠・岡本 勇 1957「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告人文科学』1、1-30頁、横須賀市博物館。
- 石橋宏克 1911「第1章 大稲塚遺跡・棒木台遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI（佐原地区3）』千葉県文化財センター調査報告 第191集、16-23頁。
- 井上 賢 1994「野島式・鵜ガ島台式土器について」『城の台町台南貝塚発掘調査報告書』千葉大学文学部考古学研究報告1、239-248頁。
- 井上 賢 2012「鵜ガ島台式土器古期の様相」『考古学論考1』159-178頁、千葉大学。
- 岡本 勇 1961「三浦市鵜ガ島台遺跡」『横須賀市博物館研究報告』5、1-15頁、横須賀市博物館。
- 岡本東三・小笠原永隆 1995「城ノ台南貝塚発掘調査報告書」千葉大学文学部考古学研究報告1、150頁。
- かながわ考古学財団 1996『かながわ考古学財団調査報告13：本入こざつ原遺跡』かながわ考古学財団。
- 金子直行 2017「縄文早期鵜ガ島台式土器の成立過程について」『二十一世紀考古学の現在：山本輝久先生古希記念論集』353-363頁。
- 佐々木克典 1982「縄文時代早期の遺構と遺物」『神谷原II』555-563頁、八王子市柵田遺跡調査会。
- 鈴木啓介 1998「鵜ガ島台式土器の変遷」『法政考古学』24、1-20頁。
- 関野哲夫 1980「鵜ガ島台式土器細分への覚書」『古代探叢』17-36頁、早稲田大学出版部。
- 高谷英一 1995『千葉県佐倉市白池台遺跡・西御門荒生遺跡A地区・西御門荒生B地区ちばりサーチパーク開発事業予定地内埋蔵文化財調査1』印旛市文化財センター。
- 高谷英一 1996『千葉県佐倉市間野台貝塚第2次発掘調査報告書』、印旛市文化財センター。
- 中村宜弘 2005「飛ノ台貝塚を見直す2 飛ノ台貝塚検出の炉穴について－第1・2次調査の検出炉穴を中心に－（上）」『飛ノ台史跡公園博物館紀要』2、1-10頁。

- 西村正衛 1984「茨城県行方郡潮来町挾間貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－』59-75頁、早稲田大学出版部。
- 西川博孝 1984『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV－No.7遺跡－』千葉県文化財センター。
- 野口行雄 1983『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告IV－No.14遺跡－』千葉県文化財センター。
- 蜂屋孝之 1998『桜井平遺跡－干潟工業団地文化財調査報告』千葉県文化財センター。
- 原川雄二 1996「多摩ニュータウン No.72遺跡」東京都埋蔵文化財調査センター。
- 原川雄二 2004「多摩ニュータウンNo.351遺跡」東京都埋蔵文化財調査センター。
- 前原 豊 1988「下鶴谷遺跡」『柳久保遺跡群V』1-64頁、前橋市埋蔵文化財発掘調査団。
- 野内秀明 2001「条痕文土器群後半期の諸段階－茅山下層式・茅山上層式土器とその周辺の土器群」『考古論叢神奈河』9、79-108頁。
- 山内清男 1928「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』43(10)、463-464頁。
- 山内清男 1929「関東北に於ける繊維土器」『日本考古学選集』21、佐藤達夫編、26-56頁。
- 渡辺修一 1993『千葉市地蔵山遺跡（2）』千葉県文化財センター。

図版出典

- 第1図 アジア航測株式会社の赤色立体地図（国土地理院）をもとに筆者作成
- 第2図 中村2005より引用
- 第3図 蜂屋1998より引用
- 第4図 筆者作成
- 第5図 筆者作成
- 第6図 1～4：中村2005より引用
- 第7図 井上1994より引用
- 第8図 高谷1995より引用
- 第9図 佐々木1982より引用
- 第10図 高谷1996より引用
- 第11図 筆者作成
- 第12図 1：原川1996、2：前原1998より引用
- 第13図 1：原川1996、2：高谷1995、3：かながわ考古学財団1996、4：佐々木1982、5：野口1983より引用
- 第14図 1・2：石橋1991、3・4：渡辺1993、5・6：蜂屋1998より引用
- 第15図 1：井上1994、2：原川1996、3：渡辺1993、4：原川1996、5：かながわ考古学財団1996、6：佐々木1982、7：野口1983、8：西村1984、9～11：蜂屋1998、12・13：渡辺1993より引用
- 第1表 筆者作成
- 第2表 筆者作成